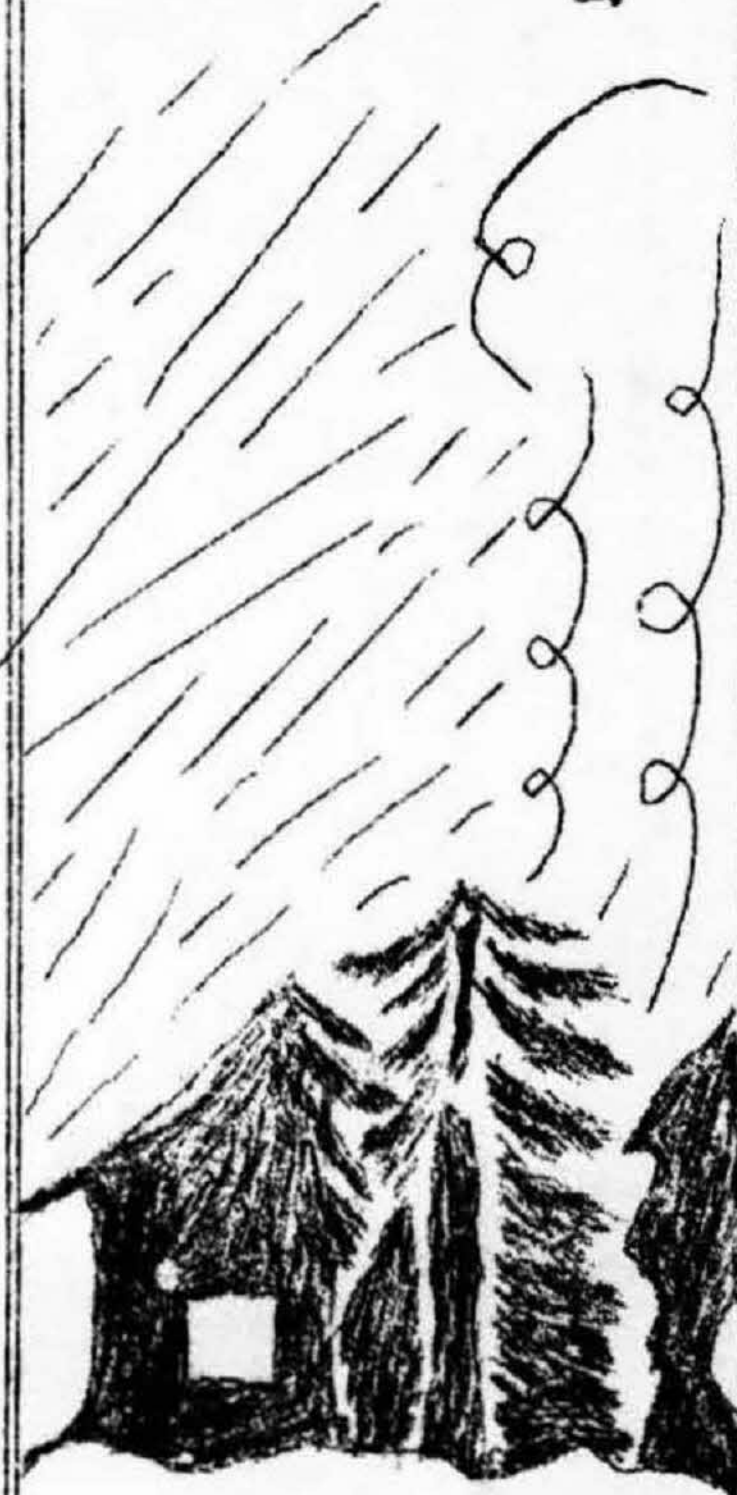


會報



第三年第七号

昭和七年九月二十五日発行

通巻二十二号

富士三景

五合目の風呂

もう殆んど足許の見えなくなつた山道を、五合目の室をさして登つてゆくと、薄闇の中にボツカリと坊主頭のシルエットが浮上つて、上から聲がかゝつた。

「旦那、今夜あ、風呂がわいてますよ、まあ這入つておくんぷさい」

「風呂が沸いてる？、馬鹿にするない。こんな山の中で……」

「昨日、一昨日とえらい降りだね、お客さんも六七人泊つて居なさるし、強力衆の手もたんとあつたから、久振に風呂をたてたんですよ」

「ほう、すると天水風呂だな、素敵だ、有難いなあ、僕は日頃精進がいゝからね」

かうして、大宮口五合目の小屋で、全く思ひが

た。

雲の光

剣ヶ峯から白山ヶ岳へと続く外輪山の空際線越に、真白な入道雲がむく／＼と盛り上つた。と見る間に三つ、四つ、五つ、恰も噴泉が蒸気を吹き上げる様な勢で、一万二千尺の雲の頭が盛上つてくる。忽ちスーッと薄れて碧空にとけ入るかと思へば、又忽ち横に流れて雲の峯を崩す。夏の真晝の海で、沖合遙に望む入道雲の頭を眼のあたりに見てゐるのだ。さんらんと輝く陽をあびて目も眩む様な白光を放つ。雲の光だ。雲には *silver* *light* があるといふ其白銀の輝だ。

山頂の湧水

山頂の金明水も、銀明水も、実は商賣氣から出たインチキ雪しろ水だと永いこと信じてゐた。がそれは大変な誤だつた。正銘の湧水である。金明水と銀明水の位置は共に頂上のひ字形地形の最低

部にあるから、山頂に降る雨も雪も、山を形成してあるあの自然の大爐過装置によつて、此ひ字谷の最凹部に溜るのは當然であつて、さればこそ一万二千尺の高地でも日に三升位の水が湧く。八月廿三日の眞晝、銀明水の傍で噴火口底に當つて威な涼々の響をきいた。嘗て御岳の頂上できいた音にそっくりだった。始めは噴火口に渦巻く風の音かとも思ったが、其日は殆んど無風だった。此不思議な水音（？）を神官は次の様に説明してくれた。

「あの音をおき、なさい。あれは地下水の音です。外輪山から集つた水―雨水も、残雪の雪しろも―が一箇におつて噴火口底に流れてゆく水音なんですよ。」

其日は四、五日たて続けに降り、降つた後の、始めての晴れた日だったから、地下水の音は一層強くなりこえたのだらう。此小規模のものが金明水ともなり銀明水ともなつてゐるのだ。流れ流れて山麓に及んだものが白糸の瀧となり、音止の瀧となり、大宮町浅間本社傍の湧玉の池となつてゐるのだ。

(浩一郎)

尾瀬漫草

まむしのこと

まむしと云へば関西では蒲焼屋の看板で親しみがあつたが、本物のまむしは生來苦手である。八丈島では一尺二、三寸のまむしを殺したといふ武勇傳もあるにはあるが、富士の青木ヶ原では約一町程横ッ跳に逃げたと云ふ記録がある。湯の小屋で午睡して了つたので午後一時過ぎに漸く出掛けた。眞夏の日指がブナの密林を通して、如何にも明るく、下生えの上に淡いかげらうが立昇るといふ気持の良い午後だ。これが亦まむしにとつては甲羅を干すのに絶好の日和なんであらうか。出るわ、土色をした二尺に足らざる例の奴が、天長節の代木練兵場の兵隊さんの如く（？）集つて、小径狭しと頑張つてゐるんだから、誠に閉口した。此方は高尾山で買った二十銭の竹のステッキを斜に構へ、寄らば払ふの勢を見せて突進して行つた。だが案ずるよりは産むが易しで、蛇君此方の氣勢に吞まれて總退却して呉れた。案外弱氣なまむしである。以後恐れる必要なしと初めて悟りを開いた次第である。針葉樹会には人面獸身の手合が多い。まむし位は手玉にとる勇士（？）も多いと聞く。沢山採り度いならば、八丈島へ行くよりも、此のハ谷越へ出掛けられることを希望する。

尾瀬ヶ原の怪へ、ソを濡らすこと

至佛から眺めた尾瀬ヶ原の景觀は實に絵の様に

美しい。緑の絨壇を敷きつめた様な感じのする温原の周縁から美しい樹葉樹林が種々の形に侵入し、中には天の橋立の如き形をしたものもある。樹林と温原との交錯するところ、そのたゞいずまゝには威嘆の聲を惜しむ者はあるまい。

この長さ二里、幅約一里の温原には幾条かの小径が、いとも鮮かに通じてゐる様子が取敢され。あの原の縁まで降りさへすれば坦々たる道で尾瀬沼まで往くのは單簡なものだと誰でも思ふだらう。これが全く誤りなのだ。

五十分足らずで至佛の頂上から一直線に山ノ端小屋に降った。密雲低迷今にも降出しそうである。既に十時半空腹でもあるが、一息に尾瀬ヶ原を越して檜枝岐小屋へ行き、ゆっくり煮飯を炊くつもりで、例の坦々砥の如く見えた道を進むと一丁程も行かない裡に腰まで泥濘に陥没して了った。汚ない泥がべつとりと服に粘り着いて仲々とれない。猶又川の中流に涿った儘、馬を洗ふ様に泥をおとした。可笑しいやら、口惜しいやら、独旅なので鬱憤の晴らし様もなく、むいやくいやくした気持ちで黙々と原を歩いた。至佛から見えた坦々たる径は、連続する夕立の今日此頃では、全体がグ／＼してゐて、処によつては身体位は平気で吞んで了ふ程の泥濘である。仕方なく草の繁みを拾つて迂迴

を惜しまず注意して歩いた。腹はへる。リュックを卸して休むべき処はない。立停れば忽ち靴が沈んで行く。泣きたくなつた。

三條の瀧

小屋の子供弥門君をやゝのかして、岩魚釣に三糸之滝へ出掛けた。水電小屋の岐路を経て温泉小屋の側を通ると小径は次第に降りとなる。四十分位して只見川の断崖の縁を傳ふ。約百米の下に平滑の滝が平坦な一枚岩の上を奔下してゐるのが見える。それより約十分齊尾根を降ると、四囲の山壁をゆるがす百雷の響と共に、やがて直下約二百米の壮大なる三糸の滝が眼前に展開した。午後の日が滝の正面に當り、その下半身に巨大なる虹を掲げてゐる。その壮麗なる景觀は言語に絶する。飽かず眺むること三十分漸く帰路に就いた。檜枝岐小屋迄約一時間を要した。弥門君途中で釣竿を折つて了つたので、岩魚の土産は断念する外おかつた。

宿泊無料長藏の小屋

朝食を炊くのが面倒なので飯盒の底を叩いて間に合せて置いたが、燧岳の中腹迄来ると空腹に堪へられず、どうにも脚が動いて呉れない。流石に誇を持つ健脚も燃料の欠乏には勝てない。十歩一休は遂に五歩一休。噴火口の土にまみれた残雪を

かじつて何んとか誤魔化し、七者の如く頂上へ辿り着いた。眺望絶佳、青空が腹にまで沁みる。平岳の平頂、會津駒の女性的な容姿。スキーだったらどんなに面白かろと考へた。後から登って来た人、松坂屋の包紙を開いて徐ろに食パンを取出しバターを十分に塗ってゐる。さもし根精とは思ひながら、旨そうですわね。とつい口を滑らしたのが勿化の幸で遂に貴重なる一片のパンをせしめて外見いとも謙譲に而して内心歡呼の叫を擧げた。降りには元氣だ。草むらから隠して置いたりユツクを取出し沼尻の湖畔の休亭で飯盒炊爨を初めた。銭別に貰った紅茶が沸々と音を立てる頃、通りすがった紳士連煙りを認めてやつて来て共に食事といふことになった。先方の砂糖で紅茶を十分御馳走してやった。海老で鯛といふ解ではないが、蹠詰類まで共產主義を実行して充分に腹を肥した。それから約二時間午睡と酒れた。醒むれば既に日は西山、長藏小屋の舟が客を迎へに来たので、客に頼んでリュックだけ載せて貰ひ、空手で湖岸をノンビリ歩く、途中で出遭った道連れは御苦勞にも独りで重いギヤンプを背負つてゐるので、うまく話込んでそのギヤンプに泊まることに決めた。因に云ふ。長藏小屋宿泊料一月八十銭、舟賃一人二十銭。但し内證の話しだが日光名物ピカ／＼ゴ

ロゴロで降り通し、終夜睡れなかった。

生存競争山人角逐

・長藏小屋から例の鬼怒沼林道を黒岩山の手前迄来ると道標がある。「鬼怒沼へ二里十町」とあった。そしてその側に別に「左川俣温泉を経て噴泉塔湯本近道」と書いてあつた。黒岩山の北側を巻いて川俣温泉へとは、如何にも可笑しいと思つたので、その徑を少し探つて見たが、次第に心細くなつて行く様だつた。その晩八丁湯の主人鈴木君に聞いて見ると、道は無いと云ふ。嘗ては鬼怒沼林道を来る客は殆んど川俣温泉に泊る外は無かつたが此頃は八丁湯と日光沢に温泉宿が出来たので川俣が次第に寂れて来た。そこで川俣の人が嘖起して、或は鎌一つ持つて山に入り此処から引馬林道に出る迄草だけ切拂つて、経だと潜称してゐるのだらう。何れ引馬峠へ出て地圖にある馬道を川俣へ降る外はないから、近道どころか却つて遠道である。

鬼怒沼の幻想的風致にすっかり氣を良くして約二百米許り降ると、左へ山腹を瀬む立派な道が出来てゐて入口が閉塞してあつた。変だなと思つた。日光沢に温泉宿が東京の資本で出来上つてからは、大抵の人は此處でへばつて泊つて了ふ。八丁湯では面白くない。そこで鈴木君敢然憤起して、八丁

湯の裏手から山を登り日光駅の五、六百米上流の合流点の上にある滝を通過して鬼怒沼温泉へ直通する経を拓く為、約二ヶ月半并當で努力した処、行き着いた処は前記道であつた。失敗つたと思つたが出来たものは仕方ないので、その儘とし、營林署へ届出た。近く林道として許可されると云ふ。

鈴木君の努力で大書すべきことは、八丁湯から日光沢温泉を通過し、鬼怒川本流を隔んで直接丸沼へ林道を開鑿したことだ。此間約二時間で達することが出来ると云ふ。此の経を利用すれば、東京から丸沼を経由して鬼怒沼を見物し、八丁湯又は日光沢に一泊して湯本へ出るコース及びその逆コースが楽に一泊旅行として可能となる。秋の探楓旅行には特筆すべきコースとならう。

地図には無いが八丁湯から噴泉塔（湯沢の中流にあり）を経て西沢金山に通ずるショートカットがある。噴泉塔は、川俣温泉と八丁湯日光沢温泉とによって湯本から来る客の争奪戦場である。川俣温泉では此処へ新道を開鑿した。そして道標に曰く「川俣温泉を経て鬼怒沼尾瀬沼へ近道」とあつた。地図を拡げて見給へ。無知の旅人を如何に迷はしてゐるか解るだらう。山人角逐の弊此の如し。

鬼怒川の温泉比較

日光沢温泉は建物は最も新しいが、湯は白濁し、湧出量は乏しい。但し自炊小舎の設備がある点勝つてゐる。東京の弁護士其他が合資して建てたもので、小屋番を頼んでやつてゐる。小屋番は附近の山の智識は殆んど零に近い。

八丁湯は無色透明で湧出極めて豊富、效能は主人に尋ねても知らないと云ふ。温度は可成り熱い。小舎も相當新しく、主人は附近の山に明るい。地の利も一番良い処だ。

川俣は僕は知らない。聞く所によれば、湯は少く、建物古く、晩になると女は如何ですかと伺ひに来ると云ふ。其道の好き者は行くべし。古いだけに山の湯らしい気分は味はれると思ふ。地の利は悪い。八丁湯から二時間行程であつて、良い道だと云ふ。

宿料は何れも一月乃至一月五十銭である。

一九三二、九、一〇、（平家蟹）

古き山日記より

空高み 穂高山なみ
雨に 風に
雪に 嵐に
堪えて 思ひて

いにしへも 新やありけむ
とことばに 新やありなむ
神在し そびえたちたり
たかだかと 空を限りつ
くろぐろと 星に迫りつ
おのがじし 背並争さう
徳高やまりみ

いざとよ 我は男の子
ひたすらに 心あくがれ
いたゞきを 究めむものと
雪をおみ 岩にすがりて
力をつくし 命を限り
登りのぼらむ その頂に

いたゞきも いまはまづかし 岩鏡
過ぎがてなくも しばしいこはむ
神います 徳高山なみ 雲だにも
いゆき憚る 神在すぞも

(園)

會計報告

昭和七年度上期會計報告

一級會計

收入

支出

前年度繰越金

一八・六七

會報印刷代内拂

一八・〇〇

本年度會費 七一・五〇 集會費 一〇・二六
昭和六年度以前會費 一八・〇〇 通信費 八・〇一
雜收入(創会誤差) 四・〇〇 如水會心附 三・〇〇
計 一〇八・五七 計 三九・二七

残金 六拾九円参拾錢也

特別會計

收入

支出

寄附拾毫口

五・五〇

近藤氏御祝儀品

五・〇〇

残金

五拾錢也

追記、未收會費は参拾毫円五拾錢ですがすべて
近い内に御納入下さる事と思ひます。猶このほか
本年度在京會費は十月にお納め願ふ事になって居
ります。その總額は五拾四円で両者合計は八拾
五円五拾錢になります。會計係が嚴格するとの
御批判を承りました。お互に針葉樹會を愛する
身の上です。御察察下さい。

昭和七年九月十五日

會計係

園山徳三郎

記録

将小屋沢より至佛を越え尾瀬沼、鬼怒沼、日光へ、
八月六日晴、上野駅発(一時二〇分、単独行
八月七日晴、湯松曾(四、四〇)―栗澤(五、四〇)―
大倉峽(六、五)―武尊川(六、四〇)―上ノ原
諏訪神社(七、五〇)―八、(一〇)―湯之坂―上ノ原

スキ場(八、五〇—九、一〇)—湯之小屋(一一、〇〇—一、一〇)—小楠保川(二、一〇—二、二五)—這摺沢(四、〇〇)—狩小屋(四、三〇)。

八月八日晴、狩小屋(五、一五)—第一ノ滝(五、四五)—右ヨリ大ナル沢合す(五、五五)—三條ノ滝(六、一〇)—尾根上(八、二〇)—至佛山頂上(八、二五—九、四〇)—一切明を東に降る—山ノ端小屋(一〇、三五—一〇、四五)—尾瀬原—松枝岐小屋(一二、四〇—一二、四五)—温泉小屋(三、〇五)—三条滝(三、五—四、〇〇)—松枝岐小屋(五、〇〇)。

八月九日晴、松枝岐小屋(六、三〇)—沼尻(七、四五)—八、〇〇)—燧岳(九、五〇—一〇、三〇)—沼尻(一一、三〇—一三、一五)—長藏小屋ギャンポ(三、五五)。

八月十日晴、ギャンポ(六、三〇)—沼山峠道より分岐す(六、四〇)—コブツノ田代(七、一〇)—赤安山(八、一五)—黒岩山西側ノ道標(八、四〇—九、一〇)—黒岩山南尾根上引馬林道分岐道標(九、三〇—九、四〇)—黒岩第一峯(九五、六)—黒岩山(一〇、一〇—一〇、三〇)—前記引馬林道分岐道標(一〇、四〇)—二、六八峯北面に水あり、(一一、〇五—一一、一〇)—鬼怒沼(一一、一〇—一二、二〇)—鬼怒川(一二、三〇)—日向及オロ恐沢の二滝を見に行く—日光沢温泉小屋(三、〇〇—四、〇五)—八丁湯(四、一五)。

八月十一日雨、八丁湯(八、〇〇)—手白沢(八、三〇)—手白山等高線に数字を入れたる尾根上、七二〇米位(九、一五—九、三〇)—噴泉塔(一〇、一〇—一一、一〇)—高嶺山

北面等高線に数字を入れたる尾根上、七二〇米位(一一、五〇)—西沢金山(一〇、〇〇—一〇、二〇)—金田峠(一二、一五—一二、二〇)—湯本板屋(三、二〇)。

八月十二日雨、雨天の爲白根登山を断念し日光に遊んで帰京。(平家蟹)

部室から

夏山の記録をと手塚さんから求められて大分日数もたちました。が未だ學校が始まつたばかりで部員も出揃つておりませんので詳しい記録は御報告出来兼ねますが今年の夏の記録は大体次の様です。

1、白馬、唐松岳 加藤安吉 他一名

七、一二、晴、二俣—猿倉—白馬尻—葱平

一三、雨時々晴、葱平—白馬頂上小屋

一四、曇、頂上小屋—鑓ヶ岳—奥不帰岳—唐松岳—唐松小屋

一五、曇、小屋—八方池—四ツ谷

2、針ノ木越、平行 加藤安吉

七、一六、雨、大町—大沢小屋

一七、一八、雨、滞在

一九、雨、小屋—針ノ木峠小屋

二〇、雨、滞在

二一、晴、針ノ木峠往復、小屋—平小屋

3、立山 鈴木英雄、十合健二、堀岡清、

七、一四、晴、千垣—藤橋—称名小屋
一五、曇、称名小屋—追分—地獄谷—別山乘
越小屋

一六、一七、一八、一九、風雨 滞在

二〇、平へ行く堀岡と別れる 小屋—称名

二一、称名—千垣—富山—猪名—船津

二二、船津—平湯—安房峠—上高地

七月中旬の雨にたゞられて立山劔へは行かれず
乗越小屋から引きかへして自動車で船津へ行き上
高地に入る。

四、黒部東沢湖行、堀岡清、加藤安吉

七、二二、晴、平小屋—針ノ木谷、南谷出合—黒

部出合幕営

二三、幕営地—東沢出合—一沢、二沢中間幕

営

二四、晴、幕営地—三沢—野口五郎よりの沢

出合—鮎小屋

二五、晴、小屋—東沢乗越—三股蓮華小屋

二六、晴、小屋—双六池—槍—上高地

五、第一次上高地キヤムプ

七、二二、船津より安房峠を越えて鈴木、十合上

高地に來たり玄文沢の例のところにて天幕を張
る。

二六、三股蓮華から一気猛烈なカンバリ振り

をみせて東沢を終へた堀岡、加藤が來たる。
夜おそきたため天幕の所在わからず清水屋泊。
一説によれば清水屋満員のため風呂場を一夜
の床としたさうな。

二七、高見名古屋より來たる。

二八、鈴木帰京。

二九、高見、十合、堀岡、加藤前穂へ行く、加

藤足をいたため途中より引き返へす。

三〇、十合、加藤帰京。高見焼へ。

三一、高見、堀岡、東沢左股から三本槍へのぼる、

その帰り堀岡大事なピッケルを折つてしまふ。

意気沮喪するに余りあり。

八一、滞在、清水屋に來り針葉樹第六号をむし

やぶり読む。

二、天幕をたゝみ堀岡帰京、高見は中尾峠を

越へて穂高温泉へ (未完)

(6、7、8、9は紙面の都合上次号へ譲る)